

大学における看護学教育への視座

金川 克子

概要

本稿は大学における看護学教育を概観し、看護学教育の発展に向けての筆者の考えを述べたものである。

わが国で、看護学の教育がはじめて大学で行われたのは、1952年に高知女子大学が、つづいて1953年に東京大学であり、数年して聖路加看護大学である。しかし、その後の動きは遅々としていたが最近10年間に大学の数が急激に増加している。

その背景には看護に対する社会的ニーズの増大や看護学の発展等、さまざまな要因が絡み合っていると考えられる。

しかし大学において看護学を発展させるには看護学の学術的基盤を堅固にし、看護学教育の基礎作りを推進し、豊かな人間性と専門職業人としての基礎的能力を備えた人材の育成に向けての努力が必要である。

キーワード 看護学教育、看護系大学数の推移、看護学、看護学教育の発展、石川県立看護大学

1. はじめに

筆者は、本格的に看護学教育に入るまえは、一総合大学の医学部助手(公衆衛生学)として、9年間、講義の補助や実習指導に加えて、フィールド活動や研究活動等を行っていたが、医学部の教官の活動の中心は教育よりも研究に置かれている雰囲気があった。

その後1972年より、同じキャンパス内にある一国立医療技術短大看護学科に移籍し、看護学の基礎教育にとりくむことになった。当時の看護学教育は各種学校や専修学校が中心であり、筆者が所属した短大はこの年に設立されたものであり、新しい看護学教育をめざして、教育理念や教育内容・方法について、看護学を専攻する同僚と昼夜激論を交わしたことが思い出される。

同時に看護学の教員はなんと教育に熱心であるか、医学教育から看護学教育の世界に移った筆者にとっては異文化に触れたような気持ちを抱いたのも事実であった。

その背景には、当時筆者が所属していた医学教育の現場では、学生が卒業の後に、同じ大学の医局や、他の医療機関でインターンとして、実地訓練を経て、実践家としてまたは研究者として診療や研究に携わっていた。

これに対して看護学教育の場では卒業後は直ちに即戦力として働き、患者の安全・安楽を基盤により看護を提供することが求められているので、

看護学教育はそのことを意識して進められることが必要であった。

医学教育の場では、その後インターン制度は廃止されたが、平成16年度からは臨床研修医制度が発足し、医師は大学を卒業した後2年間の実地訓練が義務付けられる等変化が見られるが、看護職の場合にはそのような臨床研修制度にはなっていない。

しかし、看護学教育の場では看護の質の向上をめざし、大学化の動きが活発になり、平成15年度には108校になっている。日本看護系大学協議会がだしている「看護職の教育に関する声明」¹⁾の中には、大学教育と、専門学校・短期大学教育は異なる特性をもつとし、専門学校教育と短期大学教育では看護ケアが着実に実践できる人材を育成するのに対し、大学教育は専門職業としての特性をもち、看護学の学問を追及し、かつ学問的に裏打ちされた看護実践を行うことのできる人材を育成する、と謳われている。

それぞれの大学がこのような理念のもとで、実質的な教育がなされているかはわからないが、筆者も大学において看護学教育に従事しているので、本稿の目的は、大学における看護学教育を概観し、看護学教育の発展に向けて私論を述べることである。

2. わが国における看護学に関する大学教育の変遷

わが国において看護学の教育が大学で行われるようになったのは、アメリカに比べて遅く、1952年に高知女子大学が、続いて1953年に東京大学で、そしてその後数年後に聖路加看護大学で看護

学の4年教育を実施している。現在までの大学数推移を図1に示す。1990年ごろまでは10校程度であったが、その後急激に増加してきており²⁾、2003年度末では108校になり、2004年度にはまだ増加の傾向が予測されている。

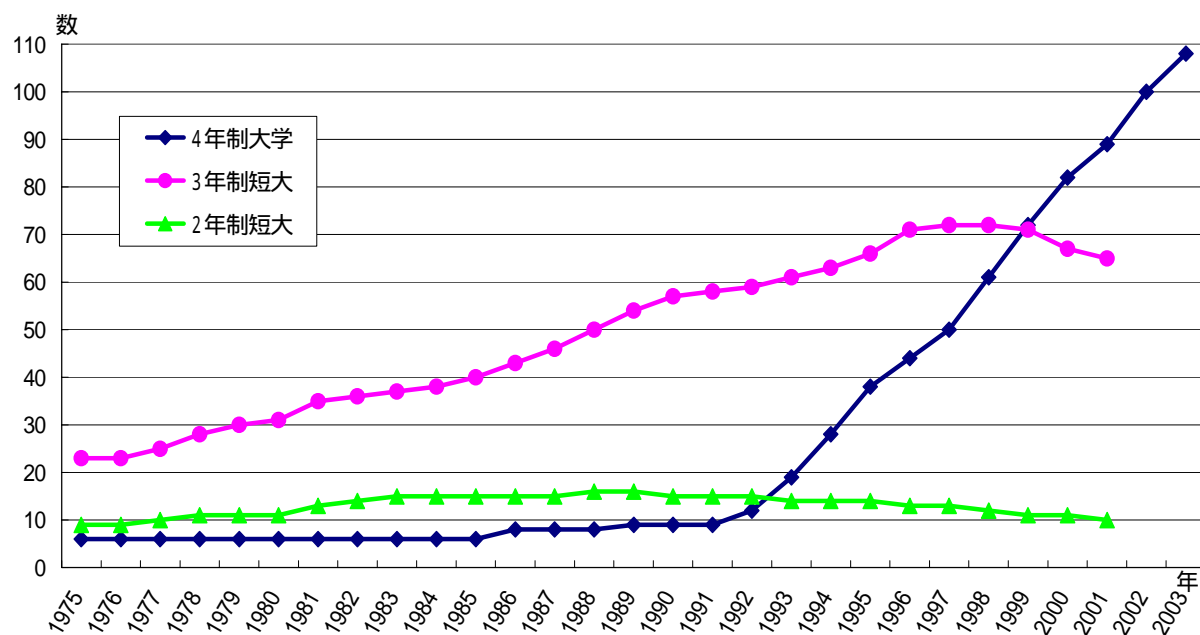


図1 看護系大学・短大数の年次推移 注：文献2より作成 2002,2003年の大学数は筆者追加

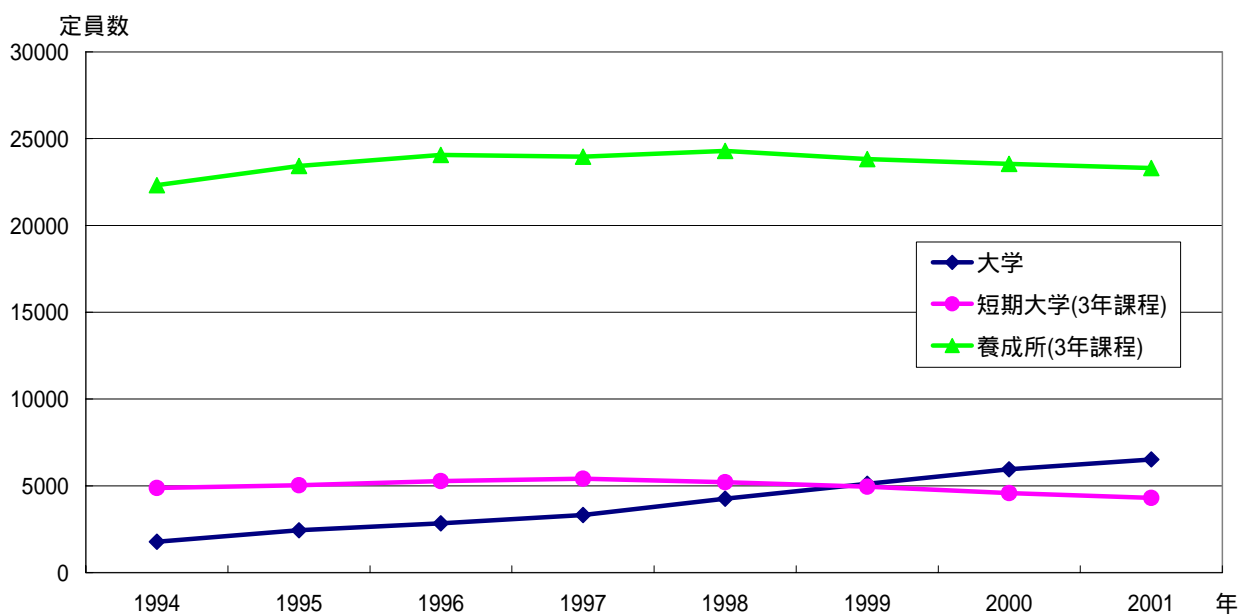


図2 看護師3年課程別養成機関の1学年定員の推移 注：文献2より作成

ちなみに、2002年度でみた3年制の専修学校は489校、3年制短大は60校であり、これらの学校の平成2002年4月でみた一学年定員は26,012名であるのに対し、同年の大学の一学年定員は7,140名となっており、その推移は図2に示した³⁾。なお、大学の学生の一学年定員数は他の2種類の養成施設のそれらと比較すると、その割合は27.3%しか占めていないが、この割合は徐々に

増加していくことが予測される。

また、2001年の統計では卒業後の進路は図3に示すように病院関係が多くなっているが、大学卒業者は専門学校の卒業生にくらべて、多様な進路を選んでいるようである。

具体的には看護師が最も多いが、次いで保健師、進学、助産師となっている。

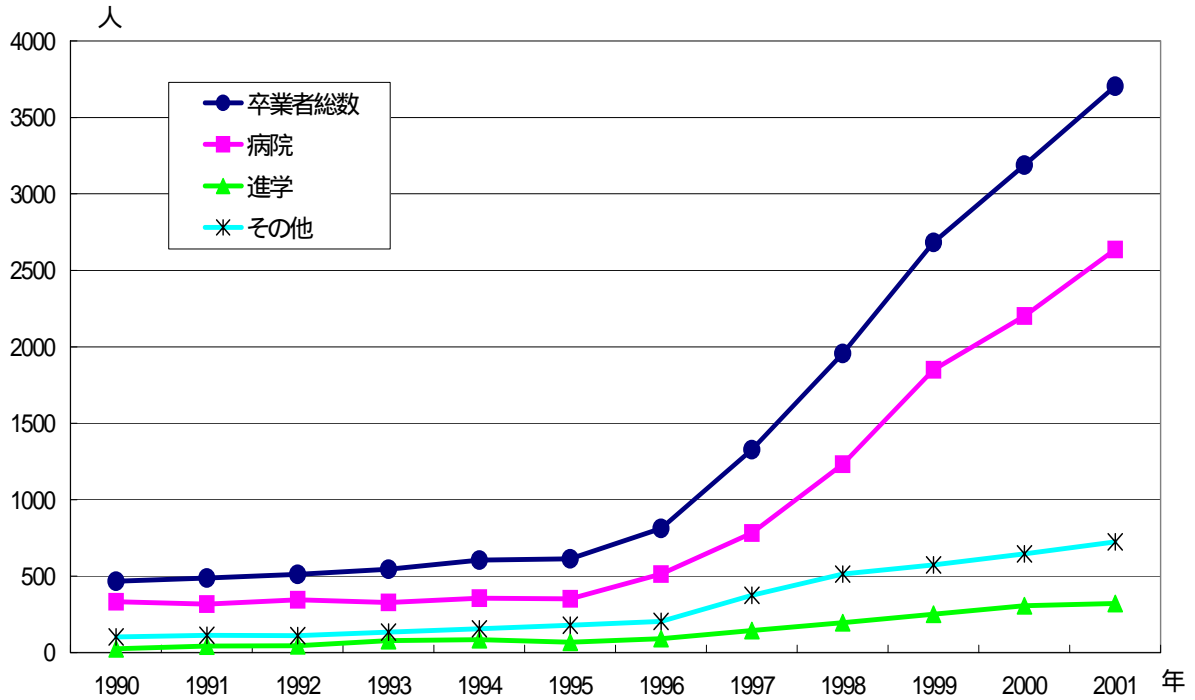


図3 看護大学の卒業生の状況 (1990~2001) 注:文献2より作成

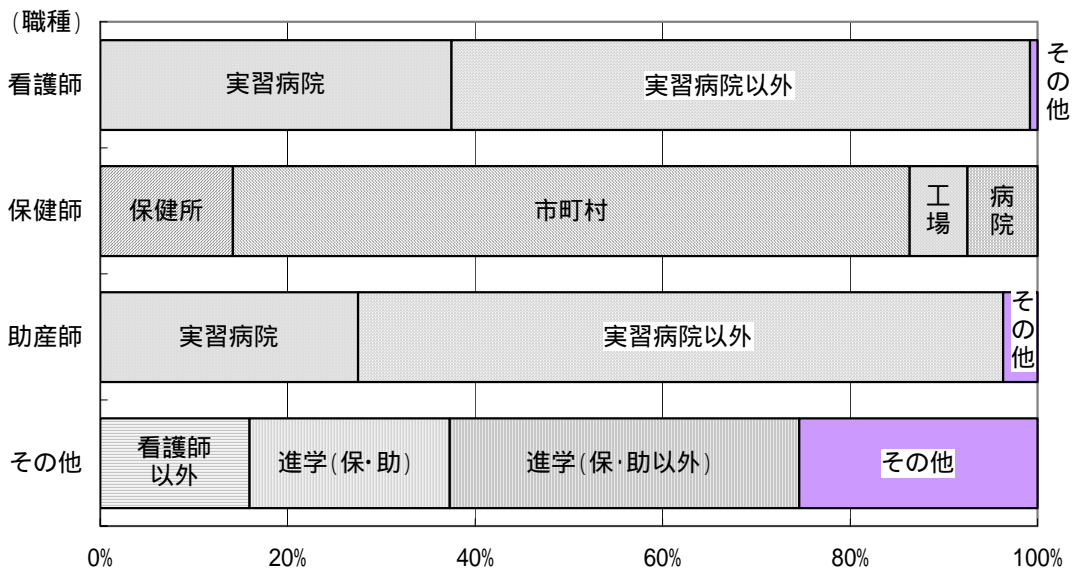


図4 看護大学卒業生の職種別進路状況 (1990~2001) 注:文献2より作成

職種別に就職先や進路先でみると、図4のように、看護師は実習病院以外が多く、保健師では市町村が多くなっている。進路先では大学院が多い様に見える。

一方、看護系大学にはいろいろな形態があり、総合大学の中の一学部としての看護学部、看護学の単科の大学、総合大学の医学部や看護福祉学部、健康科学部等の中に看護学科や看護学専攻として位置づけられている等多様なものとなっている。

設立時の目的や理念、経営や経済上等さまざまな事情によって、設立形態が異なると考えられるが、看護学がひとつの独自の学問体系として教育・研究に生かされるような形態や運用になることが望ましい。

筆者が属している石川県立看護大学は看護学の単科の大学として2000年4月に開学した比較的新しい大学であり看護学を中心に据え、教育・研究・社会活動を行っている。教育理念や目標は表1のようにしている⁴⁾が、その成果や評価は将来に期待している。

表1 石川県立看護大学の教育理念と教育目標

理念：

人間の生命や生活の質を真に理解できる豊かな人間性ととともに、専門的職業人としての基盤を備え、保健・医療・福祉の幅広い領域で、県民の健康と福祉の向上に貢献できる看護職及び看護指導者を育成する。

目標：

1. 豊かな人間性を備えた人材の育成
2. 看護学に求められる社会的使命を遂行し得る人材の育成
3. 調整・管理能力を有する人材の育成
4. 国際社会でも活躍できる人材の育成
5. 将来の看護リーダーの役割を担う人材の育成

シラバス2003⁴⁾

3. 教育の発展の背景

看護系大学の増加により、看護学教育を進展させようとする機運は大きい。

大学基準協会は平成5年7月に、協会内に看護学教育研究委員会を設置し、看護学教育基準の策定を手がけ、「21世紀の看護学教育～基準の設定に向けて～」を公表しているが、その後改定を行い、平成14年9月に同名の報告書⁵⁾を出し、看護学教育に関する基準や、看護学に関する大学院基準を改定している。

その中で、看護学教育の改革が求められるよう

になった背景として、社会のニーズの変化、保健福祉の発展、学生人口の変化、看護実践の向上、看護学の発展、看護学教育の変化そして看護の国際化をあげている。最近は医学や医療技術の進歩がめざましい反面、人々の健康や病気に対する考え方や価値観、対処の仕方にも多様性が見られる。

さらに、生命の尊厳や患者の人権に対する意識の向上も見られる現状において、人々のニーズに沿いながら安全で良質の医療を提供していくことが医療現場で求められている。このような背景を踏まえて、看護学教育においても改革を行なっていくことが必要である。

4. 大学における看護学教育の発展に向けて

大学において、看護学教育を進展させるためには、学術的基盤を堅固にするためにも、人間を対象にしたケアを追求した学問として、その学問体系を創り上げていかないとその存在が難しくなっていくのではないかと考える。

看護学は医学の一部として発展してきた経緯はあるが、看護学は病を持った人を対象に効果的なケアを提供するための独自の理論や方法を集積し、体系づけることが必要である。

筆者は看護学とはケアを通して、人々の健康とQOLの向上に寄与する実践科学であり、ケアの内容は表2に示したように、対象は病人のみならず、未病期（健康と病気の間の段階）にある人や健康な人も対象に、病気によって起こる障害やその危険因子の緩和や除去を図ることであると考えている。

表2 看護ケアの内容

1. 病人のみならず、未病期にある人、健康な人も対象にする。
2. 病気（異常）によって起こる障害（主に生命維持、日常生活上の障害）や病気の危険因子の緩和や除去を図る。
3. 病気の予防を図る。
4. 患者の自立、日常生活への対応、正常な成長・発達・老化を助け、その人らしい生活の営みの手助けを図る。

さらに、患者の自立や日常生活への対応、正常な成長や発達、老化を助け、その人らしい生活の営みができるように支援することである、と考える。次に、看護学に関する研究の発展である。

前述したように看護学は人間を対象に、より良

いケアの提供を目的としたものであるが、特に病を持った人の特徴は多種多様な個別性があり、患者-看護者関係の複雑な要素も加わった看護現象の解明や有効なケアを開発し、その成果を出していくことが重要である。

最近、医学や看護学においても、EBM または EBN と称して、Evidence を明らかにしていくことが問われている。ケアの成果を具体的に実証していくことは重要であるが、患者の思いや心理的反応、患者-看護者関係等の現象や変化を科学的に実証していくことが困難な場合もある。患者を全体的に捉えたり、看護現象を科学的に捉える方法論の模索は看護学の課題の一つでもある。

さらに重要なことは、看護学教育の基礎づくりである。看護学の教育体系は複雑であり、前述のように3年制の養成学校が数的には多いが、大学や大学院課程も増加の中で、各大学が緩やかな競争的環境のもとで独自性をとりつつ、連携を図っていかねばならないであろう。

文部科学省も平成15年より、COE（優れた研究の拠点作り）とは別に「特色ある大学教育支援プログラム」を選定している。残念ながら選にはもれたが本学もこれに応募した。

看護学教育においても優れた独自性の高い教育プログラムを工夫していくことは重要である。また、各大学が優秀な教職員と学生の人材を集めるだけでなく、効果的な教育プログラムの充実を

図っていくための教職員の意識改革も求められている。

5. おわりに

病人や家族の看護や、子供の世話や養育等看護の仕事は古くからあるが、学問としての看護学は医学や物理学、法学等他の学問と比較すれば新しく、発展過程にある。看護界においても多様な議論が見られるが、社会から見えるような看護学の学問体系を構築し、その成果を世に問うていくことが必要である。

大学はその一翼を担う立場にあると考えるが、まずは、豊かな人間性と、専門職業人としての基本的能力を備えた人材の育成に向けての努力が看護学教育の発展につながると考える。

引用文献

- 1) 日本看護系大学協議会：看護職に関する声明，
(<http://janpu.umin.ac.jp/seimei.html>)
- 2) 日本看護協会出版会：平成13年度看護関係統計資料集，
2002
- 3) 日本看護協会出版会：平成14年度看護関係統計資料集，
2003
- 4) 石川県立看護大学：SYLLABUS,2003
- 5) 大学基準協会：21世紀の看護学教育，2002

(受付：2004年1月14日，受理：2004年2月5日)

A Perspective on Undergraduate Nursing Education

Katsuko KANAGAWA

Abstract

The purpose of this article was to present a perspective on undergraduate nursing education in Japan.

The number of universities/colleges of nursing has increased over the recent ten years.

In the background, there seemed to be expanding social needs for nursing care, the development of nursing science and other factors.

To promote undergraduate nursing education, we must make an effort to develop a firm basis of nursing science, nursing education and train persons with humanity and professional capacity.

Key words nursing education, change in the number in universities/colleges of nursing, nursing science, development of nursing education, Ishikawa Prefectural Nursing University